

## 総合表現プログラムの実践活動における学び

甲南女子大学人間科学部総合子ども学科 准教授

辻 誠



### 1. 領域「表現」と総合表現

子どもには絵を描きながらその内容に関連したイメージを言葉や動作で表現するなど、未分化な表現特性があり、教員は分化した表現分野の枠にこだわらない姿勢をもつべき、と平成20年『改訂幼稚園教育要領解説』において指摘されている<sup>1)</sup>。保育や教育の現場でも分野を横断した生活発表会や音楽発表会等の総合表現の実践が行われており、今後、さらなる実践の増加、質的な発展が予想される。これらの現況を考えると、総合表現の意義について理解し、指導できる教員の育成を目指した実践的学習の教育的意義は高まっていると考えられる。しかし、教員養成校において、総合表現に関わる授業が広く実施されているとは言い難い。

これまで甲南女子大学総合子ども学科では、総合表現の内容や意義を理解し、指導できる教員の養成をめざした授業を実施してきた。さらにその学びの成果を13年にわたり、学内の芦原講堂(定員1784席の音楽ホール)において、総合表現プログラム「総合子どもカーニバル」として12月に発表してきた。そして地域の幼稚園・保育園・認定子ども園の子どもと保護者を招待し、観覧してもらっている。

### 2. 「総合子どもカーニバル」の内容

まず「総合子どもカーニバル」のこれまでの発展の経緯と、計画・運営について述べる。

#### (1) 発展

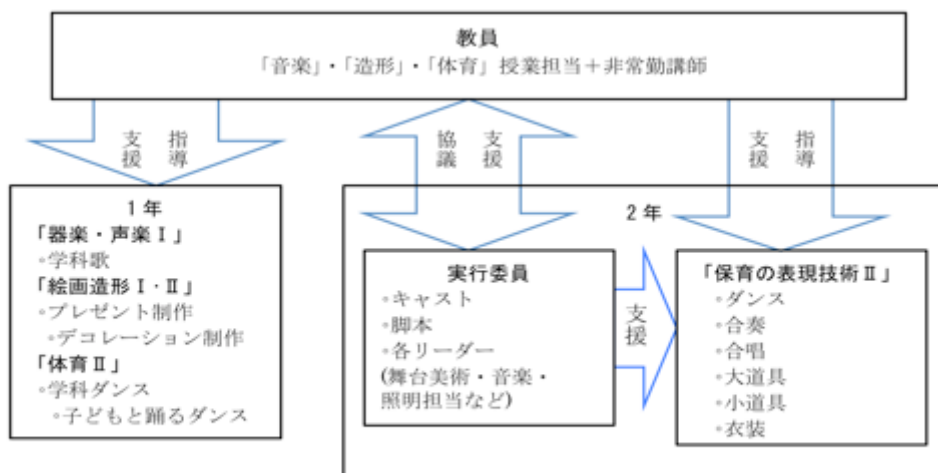
「総合子どもカーニバル」は、第1回(2007年)から第4回(2010年)までは、学生に加えて教員や近隣の保育園児による劇・ダンス・器楽演奏など、個別の演目を順に発表するプログラムとして構成されてきた。しかし第5回(2011年)からは、身体表現(ダンス)や音楽表現(器楽声楽)、造形表現(大道具小道具衣装等)、言語表現(演劇台本)等が組み込まれた一つの総合表現プログラムとして全体が構成、運営されるようになった。



第1回から第13回までのリーフレットの表紙

## (2) 計画

「総合子どもカーニバル」は、有志の2年生20~30人が実行委員会を構成し、春から週に1回程度のミーティングを行う。学生リーダーが進行役を担い、教員は必要最低限のアドバイスや説明を行う。はじめにプログラムの枠組みを決め、脚本の作成が始められ、配役が決まる。さらに舞台美術、衣装、音楽等の計画案も各担当学生から提案され、協議されて決まってくる。このように学生が主体的に計画を進めていく。



活動の準備・運営

### (3)準備・運営

#### ①授業

活動の中心となるのは、2年後期「保育の表現技術Ⅱ」の受講生（150人前後）で、ダンス、合奏、合唱、大道具、小道具、衣装の6グループに分かれる。実行委員の内10人程度がキャスト（出演者）および脚本書きとして劇活動の中心となり、他の実行委員は6グループのリーダーや全体把握をおこなう。1年生は、体育、音楽、造形等の授業の成果発表として参加する。内容は、子どもたちへのプレゼント制作、会場までのアプローチに配置するデコレーション制作、学科ダンス、子どもと踊るダンスなどである。

#### ②実行委員を中心とした様々な連携

実行委員と教員、教員間等の様々な連携が存在する。ミーティングの中で、実行委員間、実行委員と教員との協議、連絡、支援等が行われ、連携がもたれている。学生間の学年を越えた連携もみられる。前年の学生実行委員長から、次年度へのアドバイスとして、詳細な記録やノートが引き継がれている。

表現領域教員間（授業間）における連携について述べると、以下のような授業連携が行われている。各領域授業の進捗は相互に報告し合い進められる。

- 「絵画・造形Ⅰ」来場する子どもたちへのプレゼントを制作する。
- 「絵画・造形Ⅱ」会場までのアプローチに飾るデコレーションを制作する。
- 「器楽・声楽Ⅰ」学科歌を練習する。
- 「体育Ⅱ」学科ダンス等を練習する。



劇の練習



大道具の制作



デコレーション



プレゼント（パペット・ポシェット）



### 3. 「総合子どもカーニバル」の学び

次に「総合子どもカーニバル」の活動における学びについて述べる。2018年度の実行委員に対するインタビューデータから「活動の意義」、「保育者・教育者としての意思形成」二つのコアカテゴリーが生成され、分類することができた。二つのコアカテゴリーから活動における学びについて考えてみたい。



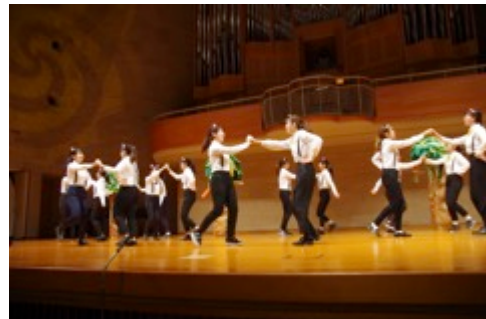
器楽演奏



じゃんけんゲーム



劇



ダンス



フィナーレ 子どもとダンス



デコレーションの前で記念撮影

#### (1) 活動の意義

子どもたちの前で上演することを最終的な目標として、実行委員会を中心とした学生が、主体的に活動のテーマ設定、脚本、演出、運営まで主体的に考え実行する。この過程において、

学生全体でイメージを共有することで「自分たちで作り上げていく」という意識が醸成され、自ら表現の技術を高めようとする意欲が高まった。活動に対する主体性が保持された結果、達成感や喜びを感じていたことが述べられていた。また、総合表現活動としての意義を理解し、計画・運営できるようになったことがうかがわれた。

#### (2) 保育者・教育者としての意思形成

学生は様々な問題に直面する。そこで、対話により活動内容を精査し、対策が協議されるなかで、相互理解と連携がなされ協働性が醸成された。また、どうしたら子どもを楽しませることが出来るのか、そのために何をなすべきかを明らかにする過程で、保育者・教育者としての意思形成がなされたことが記述されていた。

これらのことから「総合子どもカーニバル」活動の取り組みは、総合表現の意義を理解し、計画・運営する力をつける学びの機会として、また、自らやろう、精一杯やりきろうといった主体性を身につけ、成長を実感できる活動として意義があることが明らかになった。

#### 4. 今後の課題と展望

総合表現活動としての「総合子どもカーニバル」は年を経るごとに工夫が凝らされ、連携がおこなわれてきた。この活動での学びは、将来、教師・保育士となる学生の確かな礎となっている。最近では、近隣の園で就職した卒業生が、「総合子どもカーニバル」に子どもたちを連れてきてくれることもある。今後の課題は、この活動をどのように実際の教育活動に連結させるかという点であろう。総合表現の学びができる実践的な教育活動としてさらに発展できるよう力を尽くしたい。

#### 参考文献

- 1) 文部科学省 (1999) 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, pp.127-128